

Topics

2016年版のOliver Franz氏の
新作は「デザイン全面刷新」毎月、さき、めくり、
最後まで捨てるものがない
手ぬぐいの可能性を広げる
壁掛けカレンダー

古くはさいて、下駄の鼻緒や包帯代わりに使っていた、手ぬぐいの生地。そんな手ぬぐいの「さく」という特質と、カレンダーを「めくる」という動作を合わせた壁掛けカレンダー、SACUTONE。昔ながらの注染の技法と作家の個性をかけ合わせ、独創的な手ぬぐいを提案しているブランド、にじゆらの新機軸ともいえる商品だ。注染とは大阪伝統の染め手法で、一枚の布を蛇腹状に折りたたみ、表からと裏から二度染めする。そのため両面に柄があり、染料や布、糊、染めの具合によっては、いわゆる「色ざわ」のエッジがにじむ時もある。それがプリントでは出し得ない、注染ならではの儚い美しさを表現する。カレンダーの暦が入ったデザインは、注染の特徴である表裏両面の発色の良さを活かしたもの。毎月めくったカレンダーの生地は、そのまま手ぬぐいとして、あるいは布

巾や手芸の材料として使ったり、使い方はいろいろ。12月が終わり、残ったカレンダーの芯や棒、紐をすべて使い、ハサミ一つで可愛いハタキに様変わり。手ぬぐいに違う角度から光をあて、「さく」「めくる」という動作とリンクさせることで、昔々の日本の暮らしや道具を見直すことにもつながっている。

SACUTONEを「さくと、ね」と読んでみると、ストーリーの続きを予感させる響きがある。カレンダーを使い終わって何年か経ち、汗を拭うために取り出した手ぬぐい、あるいは他のものに生まれ変わった生地に描かれた暦に目が止まり、つかの間、「その時」に想いを馳せるだろう。使い込んだものに対して、“美しさ”と“懐かしさ”という気持ちが同居する。そんな日本人ならではの繊細な心がここにはある。



12月の終わり、さいて最後まで残った短冊状の生地と、カレンダーをかけていた丸い棒を使って、ハタキが完成。これで大掃除をして一年を締めくくる。

Topics

電子レンジで使える食器洗い機も可
話めやすいスクエアタイプもでたバス用品の
製作技術を活かした
新鮮すぎるおべんとう雑貨

大理石調マーブル模様のバス用品を世に送り出したメーカーが、食卓部門の新商品を開発した。それは本物以上にリアルなレタスの形のおべんとうカップ。一人の女性社員のアイデアから製品開発が始まったが、直線と曲線から成るバス用品とは異なる複雑な形状のため、造形師を探すところからスタート。府内で活動していたフィギュアの造形師とともに、レタスを細部まで研究した。要となる着色は、マーブル模様で培った2色成型技術を駆使して、葉脈まで忠実に再現。だが金型から抜きにくいという難点があり、金型製作所探しにも奔走。思いがけず近所の製作所の協力を得ることができ、ついに製品化に成功した。開発から、1年半。展示会での高い評価を土台に、本格的な商戦が始まっている。

ベジカップ

株式会社新昌化学工業所
<http://www.sinsyo.co.jp/>

Topics

難を逃れるといわれるフクロウと
長い耳が福を呼ぶウサギの新柄登場願いを込めた
ギフトにいかが？
世界に一つのお守り袋

「ヘリクリサム」の花言葉は「永遠の思い出」。いつまでも思い出に残るものを創っていきたいという想いをブランド名にしている。幼少からのアートやものづくり好きが高じて、デザインはもとよりプリント加工、縫製、商品の出荷まで一貫してアトリエで行っている。お守りは大切にしようより、身につけて願い事や目標を日々意識することが大切。革製のお守り袋は、時が経つほどに風合いを増すヌメ革。洋服にも馴染み、キーホルダーやバッグチャームとしてカジュアルな感覚で身につけやすい。付属する無地の革タグに「早く元気になってね」など、自由に書き込むことができ、気持ちのこもったギフトとしても最適。お守り袋の柄はメッセージを連想させる飛躍の「馬」や、気持ちの「ハート」などから選ぶことができる。

自分でつくるレザーのお守り袋

Helichrysum (ヘリクリサム)
<http://www.helichrysum-web.com/>

Access



Published

MOBIO (ものづくりビジネスセンター大阪)
大阪府商工労働部中小企業支援室ものづくり支援課

Staff

チーフエディター 浅野 由裕 (株式会社ファイコム)
エディター 阪本 聡子 (株式会社ファイコム)
アートディレクション 前田 敏幸 (株式会社ファイコム)
フォトグラファー 北尾 浩幸
ライター 町田 佳子
プリンティングディレクター 野村 いずみ (有限会社山添)